

進撃の群賊悪獣註



私は
むさぼりの煩惱
『貪欲』！

私は
いかりの煩惱
『瞋恚』！

■取り殺す



終いには
そいつを
取り殺すん
やあー

…なんか
イヤな
バイト
だなあ…

「多く群賊・悪獣ありて、この人の単独
なるを見て、競ひ来りてこの人を殺さんと



自力の宗教代表！
破邪の修行僧
遍那上人！

偽の宗教
吉凶禍福を祈る
宗教

■欲の宗教

「群賊悪獣詐
り親しむ」

す。



欲の宗教代表！
お賽銭真理教の
巫女あげは！

■自力の宗教

仮の宗教
自力聖道門

■悪獣と群賊

「群賊とは、別解・
別行・異見・異執・

ふっ…
ダメね悪獣は…

悪見・邪心・定散・
自力の心なり。
悪獣とは、六根・六
識・六塵・五陰・四
大なり。」（二巻鈔）
「異学といふは、
聖道・外道におも
むきて、余行を修
し、余仏を念ず、吉
日良辰をえらび、占
相祭祀をこのむもの
なり、これは外道な
り、これらはひとへ
に自力をたのむもの
なり。
別解は、念仏をし
ながら他力をたのま
ぬなり。」（一多文意）



ここは われわれ群賊の出番の

ようじゃ！

ようね！

■群賊やから悪見人や

往生人を妨げる群賊は聖道門中の悪見人

「悪見人等といふは、憍慢・懈怠・邪見・疑心の人なり。」(二巻鈔)

☆明恵上人曰く



「是の故に、疏の一处に解行不同の邪雑人と云い、一处に、別解別行悪見人等と云い、余の三処に邪惡の字無しと雖も、一处に退失傾動と云い、一处に不得往生等と云い、一处に動乱破壊等と云う。即ち是れ邪雜悪見人の所為を出す也。若し爾れば、此の中の意、別解別行人、悪見を帯び、

往生を樂う人を妨得せんと欲する。此の如き悪見人の為に動乱破壊を被らずと言う也。

別解別行即悪見に非ず、別解別行人、悪見を帯びて之を妨ぐ也…

此れを翻ずる故に知る、別解別行正見人は、反りて往生人を助成すべし…然れば、此の文に向かい正釈を作さば、邪解邪行邪学邪見を指すと云うべし」(摧邪輪)

「然るに、(法然上人は)聖道門解行学見を指すと言いいて、邪惡能別の言を置かず、甚だ不可なり。即ち一切顯密二宗佛法を指して、群賊と為すと言う也。」(同)

「汝(法然上人)…善導の別解別行人を出して、邪惡の字を刪る」(同)

明恵上人は、「邪惡能別の言を置かざるが故に、法然上人は別解別行の一切の聖道門を指して群賊と為すといひ「邪惡の字を刪る」と難じられるが、これは甚だしい言い掛かりである。

■煩惱はみかんちゃんそのもの

■煩惱に追いかける

「妄念は凡夫の自体なり。妄念の外に凡夫の



心はなきなり」（鮮妙和上）

■前にも水と火が！

■みかんちゃん自身の

煩惱が邪魔する

「いまし貪瞋強きによるがゆゑに、すなはち水火のごとしと喩ふ。善心、微なるがゆゑに、白道のごとしと喩ふ。

また水波つねに道を湿すとは、すなはち愛心つねに起りてよく善心を染汚するに喩ふ。また火焰つねに道を焼くとは、すなはち瞋嫌の心よく功德の法財を焼くに喩ふ。」

■細くてたよりなさそう

自力の白路



■これが三定死

「時に当って惶怖すること、復言ふべからず。即ち自ら思念すらく。

我今廻らば亦死せん。

住まらば亦死せん。

去かば亦死せん。

一種として死を免れざれば、我寧く此の道を尋ねて前に向かいて去かん。既に此の道有り。必ず可度すべし。」

★凡夫の『必ず』は不定

「凡夫の心は沙を握るが如し、堅めんとしても堅まらず、其の堅まらぬ、心を堅めたるやうに思て居るは、堅まらぬ沙を暫く手にて握つて居る間だ、散らずに居るやうなものなり。」（履善和上）



■迷いの心の真実を見定める

【信機自力の異安心】

○罪惡觀の徹底が信機
○徹底的に自己の罪惡を知った時に自力を離れる

「徹底的に自己の罪惡を知った時に自力を離るゝ自力を離れたのが即ち他力である」（花田和上『最近異解異安心』）

「信機を普通一般の罪惡觀と同一視する失」（藤沢教声和上『現代真宗安心批判』）





「異解者へ併し真実の如来に遇ふことの出来ぬのは、自己を知ることの不徹底なのであって、自己が深刻に罪惡深重の地獄の

ものであることが実感の出来たのが、入信の動機ではないでせうか」(同)

「如来招喚の勅命中の機法二種を聞かずに、下に向かつては我が機をながめて自力無功と信じ、上に向かつては摂受衆生の本願を信じるというふならば、それはやはり別境俯仰の機法二種であつて、信機と信法の所信を異にしている」(同)

【正義の信機】

★自らを迷いの存在と知り、罪惡(煩惱)を自覺することは、信前信後に通じる。

水火二河は信前信後で変わらない

★信機は、罪惡(煩惱)を自覺するのではなく、自力無功と信知する

「罪惡の自覺は通仏法の三世因果の理法を聞いても起こることであつて、それを直ちに純他力とは言はぬ」(藤沢教声和尚『現代真宗安心批判』)

「我身は多罪無善なれば三塗に墮在すべき障重の凡愚なりと思ふが如き念相は、前念後念その異なるべき…」(義山和上『百論

題一」

「機実を知らされるということは、罪惡生死の凡夫で出離の縁あることなき私であると知らされることであり…私の力が出離のために役に立たないと知らされることであり、私の力が役に立たないと知らされること」(灘本和上『やさしい安心論題』)

★罪惡觀の徹底は凡夫では不可能

★行者自らが自力無功(墮ち機)と見限るのではない

「是の如き等の罪、上諸の菩薩に至り下声聞・緣覺に至るまで、知ること能はざる所なり。唯佛と佛とのみ乃ち能く我が罪の多少を知りたまへり。」(礼讃)

「およそ大沼氏は…自分が考えておき機と知り、それと同時にこのままでよかったと自覺体験せよというのであるが、善導大師は仏智でなくてはわからないと言われているほどの我々の罪のふかさである、それを、我ら凡夫がどうして知って自分は堕ち機とわかるというのであろうか。それは仏願のわけを聞いていないものならば真実

の堕ち機のわかったものではない。恰も医師の診断によらないで、愚な素人が自己の病を思い込んでいるようなものである。」

(伊藤義賢和上『正流と異流』)

■そんなことしてもお浄土には往けないわ!



★機に目をつけな、法に目をつけよ

「機功を責めずに、法体の阿弥陀仏を眺むれば、決信起こる」(善和上)

「弘願の能信は能信不可得なり。唯佛有ることを見、我有ることを見ざれ。」(履善和上)

■これを聞くのよつつ

■あれは浄土三部経!

★唯信仏語

「又深信とは、仰ぎ願はくは、一切の行者等、一心に唯仏語を信じて身命を顧みず、決定して

あれは
お釈迦様が
説かれた



浄土
三部経!



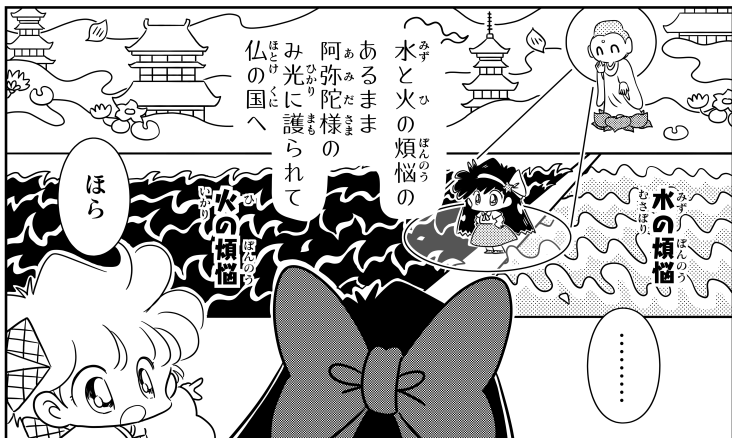
依行し、仏の捨てしめたまふをば即ち捨て、仏の行ぜしめたまふをば即ち行じ、仏の去らしめたまふ処をば即ち去る。是を仏教に随順し、仏意に随順すと名づけ、是を仏願に随順すと名づく。是を真の仏弟子と名づく。」(散善義)

★二尊の遣喚を聞いて信順する

「仰いで釈迦発遣して、指えて西方に向えたもうことを蒙り、又弥陀の悲心招喚したもうに藉つて、今二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、念念に遺ること無く、彼の願力の道に乗じて、捨命已後、彼の国に生るることを得て、佛と相見て慶喜すること何ぞ極まらん」

★法の丈夫が機の丈夫

「御当流の御安心は、法の丈夫なのがあるまゝ吾が機にう



つって決定安堵の思になるのである。法の丈夫な外に別に機が丈夫になるといふものではない」(前田慧雲和上)

★名号法が疑いを除く

「万行円備の嘉号は、障を消し疑を除く。」(略典)

■必ず行けるよ

「仁者、但決定して此の道を尋ねて行け、必ず死の難無からむ。若し住まらば、即ち死せむと。」

★仏語の『必ず』は必定

「又一切の行者但能く此の経に依って行を深信する者は、必ず衆生を誤らざるなり。何を以ての故に。仏は是れ満足大悲の人なるが故に、実語なるが故に。」(散善義)

■そのまま来なさい

■悩悩を無くす必要なんてないよ

■水と火の悩悩のあるまま…仏の国へ

■私が護るから水や火を恐れる必要は全然ないよ

ないよ

★安住の信機

煩惱具足のこのまま救われると安堵する

「汝一心正念にして直ちに來れ。我能く汝を護らむ。衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ」

「今二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず」

「機の本分に安住する」(義山和上)

「安住の信機は法の威力による」

(朝日和上)



■悩むことなんて最初から何も無かったのね

「唯衆生の疑ふべからざるを疑ふを恨む。浄土対面して相忤はず、弥陀の撰と不撰とを論ずること莫れ、意専心にして廻すると廻せざるとに在り」(般舟讃)

★救われない心配も、救う心配も如来が先取り

「機の深信の内容は自らが問題にするに先行して、本願の上に「仏かねてしろしめして」と先取されているのである」(稲城和上『歎異鈔の研究』)

「ここに自らの救われない心配も―信罪の心―も如何にして救われるか―信福の心―というはからいは(も)すべて本願の上に先取されている」(同)

■阿弥陀様に護られて安心感謝の人生

★よろこびの念仏、御恩報謝の念仏

「あら、殊勝の弥陀如来の本願や。このありがたさの弥陀の御恩をば、いかがして



報じたてまつるべきぞなれば、ただねてもおきても南無阿弥陀仏となへて、かの弥陀如来の仏恩を報すべきなり。
されば南無阿弥陀仏となふるころはいかんぞなれば、阿弥陀如来の御たすけありつるありがたさたふとさよとおもひて、それをよろこびまうすころなりとおもふべきものなり」(5:22)



あみださま
阿弥陀様に
護られて
安心感謝の
人生ね

■ちよおつ

とまった

あああ!

「あるい

は行くこと

一分二分す

るに群賊等喚び回す」

■何が安心よ何が仏様の国よ

■人間は煩惱あつて当然!

☆本居宣長く安心なんてない

「宣長は儒仏の唱える安心論は、すべて虚構の上に立てられたものとし、

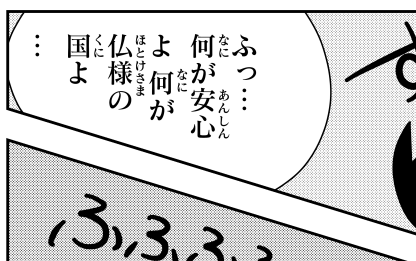


「死ぬればかやうかやうになる物などと、実は知れぬことをさまざまに論じて、己が心々にかたよりて、安心を立て候は、皆外国の儒仏などのさかしらごとにて、畢竟は無益の空論に候」

として退けるのである。

その理由は

「凡てさやうのことは、みな実は人の智を以てはかり知べきことにはあらず候へば、色々にまをすも皆おしはか



にんげん ぼんのう
人間は煩惱
あつて当然！



りのみに候」ということにある。

神道では（人のほかり知べきことにあら
ず）とし、その道理の説明を断念するほか
はない。結果としては、万人が承服しない
ことを十分に承知しながらも、神道には安
心がないと答えるほかないのである。

もし宣長の神道を宗教とよぶならば、そ
れは救済のない宗教であるということに
なるう。（『本居宣長と佛教』森三樹三郎
佛教大学佛教文化研究所年報 y1: 1982 no:
二）

「宣長は、人の問いに答えて、（小手前の
安心）は無いと明言する。（小手前）（オテ

マエ）とは聞き慣れない言葉だが、どうやら
〈個人レベル〉と言うことらしい。

〈安心〉（アンジン）とは心の平安。例え
ば浄土教なら、阿弥陀如来の本願を疑うこ
となく、その救済により極楽往生が出来る
から、死んでも平気だと安心する。あるいは、
悟りを開く。これは個人レベルでの安心だ。
こういったものは無いと宣長は言う。

個人は社会の一員であり、社会の掟
に背くことは出来ないのだから、その
社会の一員としての務めを果たせば
〈安心〉など無くても生活できると宣長
は考えた。

結局、すべては神のしわざであ
り、（人の力にはいいよかなわぬわ
ざ）で、人はただそれに従順であるよ
りほかはない。この世には悪事も凶事
も多いが、それもまた神の仕業であ
る。それに逆らうことをしないでいる
こと、それが〈真実の神道の安心〉で
あるとした。（キーワードで宣長さん
を知る「三十六の窓」安心（アンジン）
本居宣長記念館 web ([https://www.
norinagakinenkan.com/pages/59/](https://www.norinagakinenkan.com/pages/59/))



■ 幸せのリカちゃん

■ 自分勝手な欲望にふりまわされる邪教の徒よ

欲の宗教／自分勝手な幸せ（欲望）を願
う宗教

■ この浄土真宗…なんたる邪教じゃ！



★聖道の悪見人は、浄土門が仏教を惑乱していると考える

「或いは行くこと二分三分するに、群賊等喚び廻すと言うは、即ち、別解 別行 悪見の人等妄に〈見解もって迭いに相惑乱し、及び自ら罪を造って退失す〉と、説きたもうに喩うるなり。」

■水火の煩惱がさかなそなたでは無理じゃ！

つまり
すいが
水火の煩惱が
さかな
そなたでは
無理じゃ！

喝！

こんどは
わたし
私をデイスる
気？



自力聖道門の道理
煩惱のままでは仏の国へはいけ
ない

■清らかな心が必要じゃ

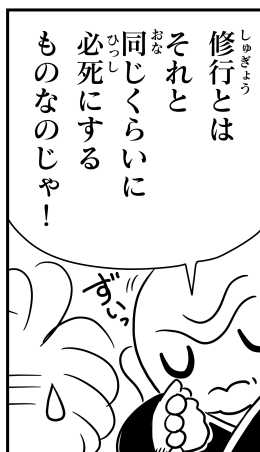
自力の菩提心

■頭燃を払うが如く

「若し人願を発して阿耨多羅三藐三菩提を求めむと欲して、未だ阿惟越致を得ずは、其の中間に於て身命を惜しまず、昼夜精進して頭燃を救ふがごとくすべし。助道の中に説くがごとし。

菩薩未だ阿惟越致地に至ることを得ずは、常に勤精進して、猶頭燃を救ひ、重担を荷負するがごとくすべし。菩提を求むる為の故に、常に勤精進して、懈怠の心を生ぜざるべし。」(易行品)

「若し此くのごとき安心・起行を作す者は、縦使身心を苦勵して、日



夜十二時急に走り急に作すこと、頭・燃・を・救・ふ・が・こ・と・く・する者も、衆・て・雑・毒・の・善・と・名・づ・く。」（散善義）

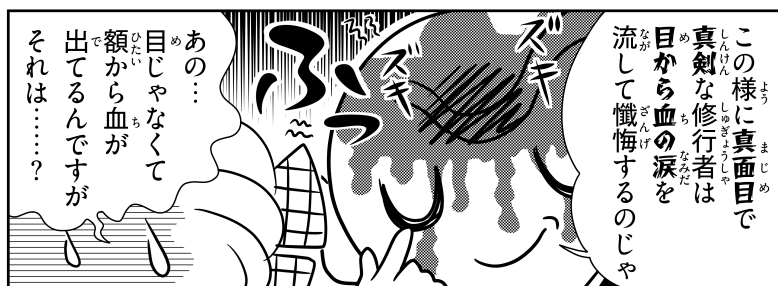
■目から血の涙を流して懺悔する

上品中品の懺悔は
身の毛孔の中より血流れ、眼の中より
血出づる

「懺悔に三品有
り。上・中・下
なり。」

上品の懺悔と
は、身の毛孔の
中より血流れ、
眼の中より血出
づる者を上品の
懺悔と名づく。

中品の懺悔と
は、遍身に熱き
汗毛孔より出で、
眼の中より血流
る者を中品の
懺悔と名づく。
…



流涙流血等に能はずと雖も、但能く真心
徹到するは即ち上と同じ。」（礼讃）

「真心徹到するひとは
金剛心なりければ
三品の懺悔するひとと
ひとしと宗師はのたまへり」（高僧和讃）

■お坊さんって悟ってるの？

■仏様の言うことの

方が正しいわよねえ

【四重破人（凡夫と菩薩）】

★阿弥陀様が大丈夫
夫と言っている
★悟ってる仏様の
方が正しい

「若し人有りて多
く経論を引きて証
して生ぜずと云は
ば、行者即ち報へ
て云へ。仁者経論
を将て来し証して



生ぜずと道ふと雖も、我が意のごときは決
定して汝が破を受けず。（凡夫）…

縦使地前の菩薩・羅漢・辟支等、若しは一、
若しは多、乃至十方に遍満して、皆経論を
引きて証して生ぜずと言ふとも、我亦未だ
一念の疑心を起さず。（地前）…

又行者善く聴け。縦使初地已上十地已来、
若しは一、若しは多、乃至十方に遍満して、
異口同音に皆云はく、釈迦仏、弥陀を指讃し、
三界・六道を毀訾し、衆生を勧励し、専心
に念仏し、及び余善を修すれば、此の一身
を畢へて後必定して彼の国に生ずといふは、
此必ず虚妄なり、依信すべからずと（地上）。
我此等の所説を聞くと雖も、亦一念の疑
心を生ぜず。唯我が決定上上の信心を増長
し成就せむ。何を以ての故に。乃ち仏語は
真実決了の義なるに由るが故なり。仏は是
実知・実解・実見・実証にして、是疑惑心
中の語に非ざるが故なり。

又一切の菩薩の異見・異解の為に破壊せ
られず。若し実には菩薩ならば、衆て仏教
に違せじ。」（散善義）

■わすかな念仏修行で往生できるはずは…

★破人は他力を理解していないので、白道



の行者が自力の念仏を修
している」と誤解する

「専心に念仏し、及び
余善を修す」(散善義)

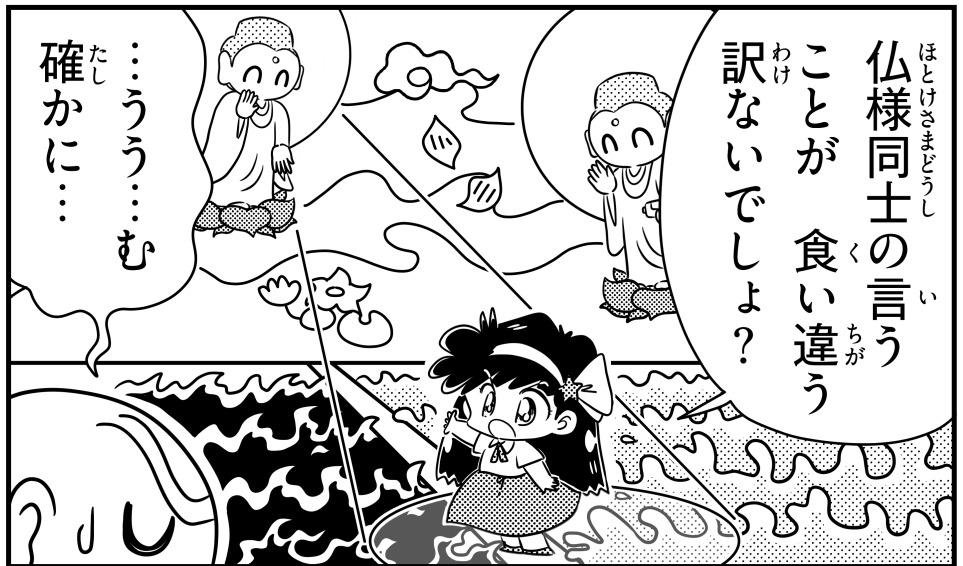
「若し解行不同の邪雑
人等有りて、来りて相惑
乱し、或いは種種の疑難
を説きて、往生を得ずと
道ひ、或いは云はく、汝
等衆生曠劫より已来及び
今生の身口意業に、一切
凡聖の身の上に於て具に

十悪・五逆・四重・謗法・闡提・破戒・破見
等の罪を造りて、未だ除尽すること能はず。

然るに此等の罪は三界の惡道に繫属す。云
何ぞ一生の修福の念仏をもて即ち彼の無漏無
生の国に入りて、永く不退の位を証悟するこ
とを得むやと。」(同)

■仏様同士の言つことが食い違う訳ないでしょ？

【四重破人(仏)】



★一仏即一切仏

「縦使化仏・報仏、若しは一、若しは多、
乃至十方に遍満して、各各光を輝かし、舌

を吐きて遍く十方に覆ひて、一一に説きて
言はく、釈迦の所説に、相讃めて一切の凡
夫を勧発して、専心に念仏し、及び余善を
修して廻願すれば彼の浄土に生ずることを
得といふは、此は是虚妄なり、定めて此の
事無しと。

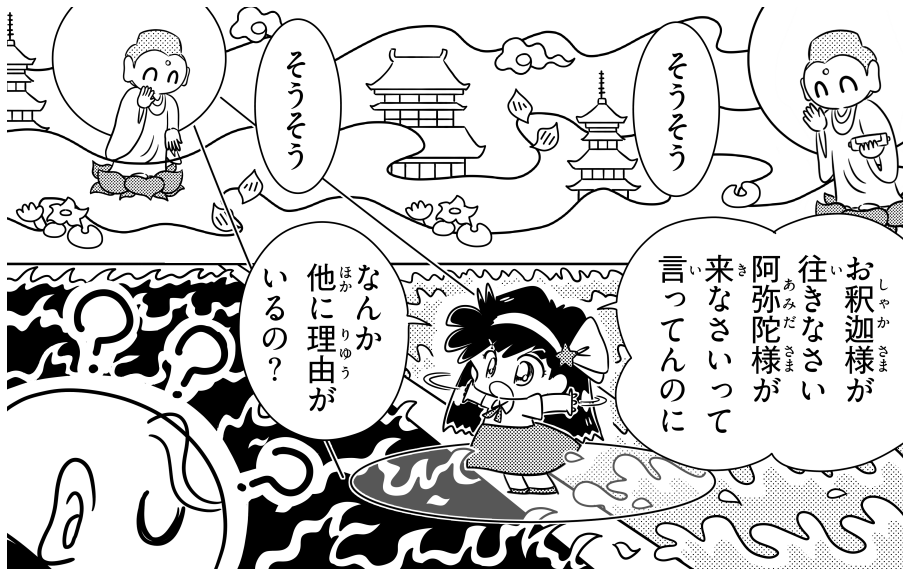
我此等の諸仏の所説を聞くと雖も、畢竟
じて、一念疑退の心を起して彼の仏国に生
ずることを得ざることを畏れず。

何を以ての故に。一仏は一切仏なり、所
有知見・解行・証悟・果位・大悲、等同に
して少しき差別も無し。是の故に一仏の制
したまふ所は、即ち一切仏同じく制したま
ふ。…明らかに知りぬ、諸仏の言行は相
違失せざることを。

縦令釈迦一切の凡夫を指勧して、此の一
身を尽すまで専念専修すれば、捨命已後定
めて彼の国に生ずるとのたまはば、即ち十方
の諸仏悉く皆同じく讃め、同じく勧め、同
じく証したまはむ。何を以ての故に。同体
の大悲なるが故なり。一仏の所化は即ち一
一切仏の化なり。一切仏の化は即ち是一仏
の所化なり。」(散善義)

■お釈迦様が往きなさい、阿弥陀様が来なさい…なんか他に理由があるの？

「仰ぎて惟れば、釈迦は此の方より発遣し、弥陀は即ち彼の国より来迎したまふ。彼に喚ばひ此に遣はす、豈去かざるべけむ



あんたの言うことなんて聞かない



や」(玄義分)

「仰せだけで安心せよ。

仰せを聞いて、それを我機へ戻して安心しようと思ふのは、深く弥陀をたのんだのではない。」(一蓮院秀存師)

■あんなの言うことなんて聞かない

聞かない

「別解・別行・異学・異見・異執の為に、退失し傾動せられざるなり。」(散善義)

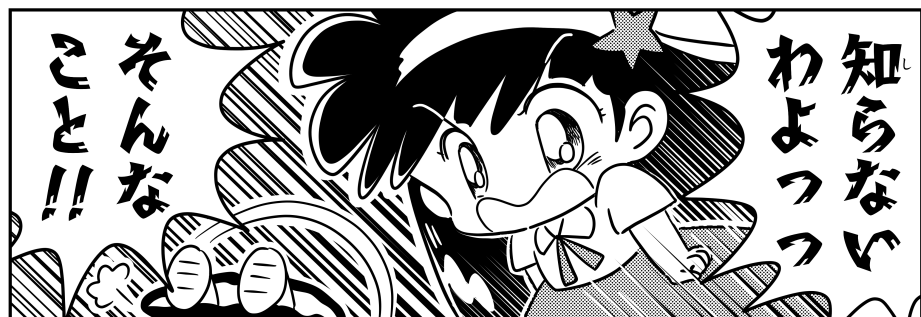
■知らないわよっつそんなこと！

「念仏は、まことに浄土に生るるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもつて存知せざるなり。」(歎異鈔)

「念仏には無義をもつて義とす。不可称不可説不可思議のゆゑに」(同)

「五種の不思議の中に仏法最も不可思議なり。」(論註)

「何に況や仏法不思議の力、豈種種の益無からむや。」(散善義)



「いつつの不思議をとくなくに 仏法不思議にしくぞなくき

仏法不思議といふことは

弥陀の弘誓になづけたり」(高僧和讃)

「聖道門のひとはみな

自力の心をむねとして

他力不思議にいりぬれば

義なきを義とすと信知せり」(正像末和讃)

「一、おなじく仰せにいはく、心得たと

思ふは心得ぬなり、心得ぬと思ふは心得たるなり。弥陀の御たすけあるべきことのた

ふとさよと思ふが、心得たるなり。少しも

心得たると思ふことはあるまじきことなり

と仰せられ候ふ。

されば口伝鈔にいはく、されば、この機

のうへにたもつところの弥陀の仏智をつの

らんよりほかは、凡夫いかでか往生の得分

あるべきやといへり。」(聞書)

「他力とは与えてもたせない御慈悲である」(是山和上)

「或人云。助けらるるものは。助ける人

の姿を見る事も。助ける人がどうして助けて下さらうと。そんな詮議はいらぬ。又それが助けられた姿ぢやとお助けを見ることもいらぬ。私は助けてやらうの声をきいて安心するだけのことぢや。」(一蓮院秀存師)

「合点ゆかずば ゆくまでききやれ

きかば合点の ゆく御慈悲

合点せいとは 口ではいいへど

不思議不思議の外はない」(同師)

「あなた私を どうして救う

わたしやひとつも 合点がいらぬ

合点いらずば その機のままよ

ご恩うれしや なもあみ

だぶつ」(才一同行)

■仏教の勉強はわしの方が

上じゃ！

「何故疑。

通途因果の通理に拘えられて、他力別意の大道に移らず。」(金剛鐸)

■悪い心もきれいな仏様の心に変わっちゃうのよ！

■みんな阿弥陀様の力だもん

煩惱のまま仏心を悟る

みんな阿弥陀様の力

「凡夫人有りて煩惱成就するも亦彼の浄土に生ずることを得れば、三界の繋業、畢竟じて牽かず。則ち是煩惱を断ぜずして涅槃分を得。焉んぞ思議すべきや。」(論註)

「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃

凡聖逆誘齊回入 如衆水入海一味」



それじゃあ
私たちも
お浄土に
往けるの？
きれいに
なれるの？

もちろん！
みんな
阿弥陀様の力
だもん
大丈夫♡

ええええええ！！
私わたしがもう二人ふたり！！

みかんちゃん
ばんのうたち



「本願円頓一乗は
逆悪撰すと信知して
煩惱・菩提体無二と
すみやかにとくさとらしむ」（高僧和讃）

「弥陀の智願海水に

他力の信水いりぬれば
真実報土のならひにて
煩惱菩提一味なり」（正像末和讃）

■あんまり悪い事すると警察が許さないから
しちやダメよ！

「そのかみ邪見におちたるひとあつて、悪を
つくりたるものをたすけんといふ願にてまし
ませばとて、わざとこのみて悪をつくりて、
往生の業とすべきよしをいひて、やうやうに
あしざまなることのきこえ候ひしとき、御消
息に、葉あればとて、毒をこのむべからずと、
あそばされて候ふは、かの邪執をやめんがた
めなり。まつたく、悪は往生のさはりたるべ
しとはあらず。」（歎異鈔）

「つぎには守護・地頭方にむきても、われは
信心をえたりといひて疎略の儀なく、いよい
よ公事をまつたくすべし。…ことにほかには
王法をもつておもてとし、内心には他力の信
心をふかくたくはへて、世間の仁義をもつて
本とすべし。これすなはち当流に定むるとこ
ろの掟のおもむきなりとこころうべきものな
り。」（2-6）

「このうえは定めおかせらるる御掟、
一期をかぎりまよりまうすべく候ふ。」

「王法は額にあてよ、仏法は内心にふ
かく蓄へよ」（聞書）

